讀賣新聞

2007年(平成19年)7月19日 木曜日

「20年は地震来ないと…」

被災者アンケート

「中越」から3年 油断 防災準備せず「反省」

「また大きな地震が起きるとは思わなかった」「水を備蓄していたが、全部飲んでしまった」。18日に読売新聞が実施した新潟県中越沖地震被災者のアンケートからは、3年前の中越地震を経験した住民たちにも油断があったことが浮き彫りになった。いつでも、どこでも起こりうる震災や災害。「まさか」「あるはずがない」ではなく、どう備えるか。「地震列島」への問いかけだ。〈本文記事1面〉

「避難所生活をしてみて反省している」と悔いるのは、柏崎市西山町の無職小嶋栄さん(70)。3年前に被災したことで、「逆に、これで20年くらいは地震はないと思って、防災の準備は何もしなかった」と振り返る。

同市内の女性介護員(37)は「保存用の水を備蓄していたが、飲んでしまい、補給もしなかった」と明かす。中越地震の教訓から、物資を備蓄していたものの、年月がたつにつれて手を抜いてしまったという。

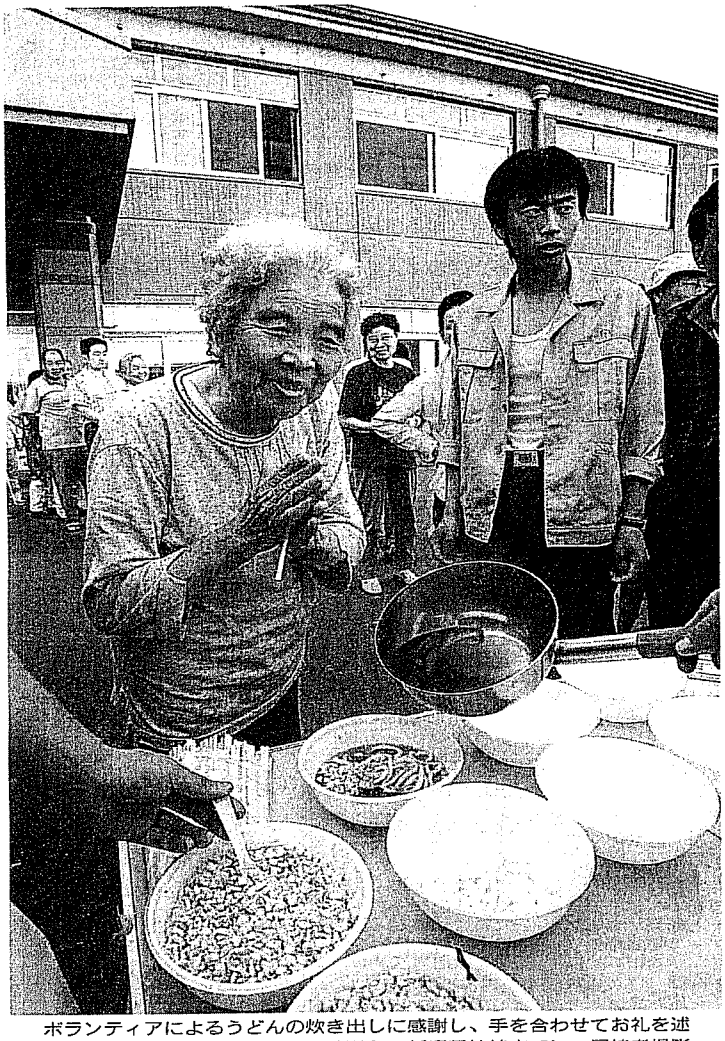
家屋にかかわる備えについても、反省の声は多い。

同市西本町の会社員船木伸子さん(41)は、「簡単な対策は、大きな地震の前では無意味」と身にしみた。家具の転倒を防ぐため、天井との間に棒を挟んで固定するなどしていたが、結局、家具は倒れたという。

築60年以上の木造2階建て住宅が倒壊した同市山本の自営業小林健一さん(36)は、「金銭的余裕もなかったので、中越地震後も(古い家屋の)建て直しは考えなかった」と話す。1階部分が崩れたが、2階にいたため、命拾いしたという。

同市西山町の会社員佐藤敬二さん(35)は3年前、自宅の地鎮祭の日に中越地震が発生、計画を変更し、耐震補強を施した。「周りには倒壊している家もあったが、おかげで、わが家は一部の損傷で済んだ」という。

一人暮らしの同市西本町の無職蓮池満さん(80)は、いざという時に備え、懐中電灯、タオル、薬、防水シートなど防災グッズを用意していた。「避難所生活でも役に立っている。年をとっても、できることはある」と話していた。



ボランティアによるうどんの炊き出しに感謝し、手を合わせてお礼を述べる高齢の被災者（18日午後6時過ぎ、新潟県柏崎市で）＝尾崎孝撮影

被災者アンケート質問と回答（一部）

【中越地震を教訓にした備え】（複数回答）

・防災グッズの準備	23人
・非常食・水の備蓄	19人
・家具などの転倒防止	10人
・住宅の耐震補強など	4人
・なし	72人

【ボランティアへの期待】

・自宅の後片づけ	32人
・高齢者の介護	4人

※その他「心のケア」「大工など技術者」「重機を動かせる人」「避難所での子どもの遊び相手」「防犯パトロール」など

【健康状態】

・変わらない	102人
・悪化した	27人
・良くなった	1人